

別會を行つた。學生委員の挨拶、柴見氏のお別れの言葉があつて、盛會裡に會を閉じた。

出席者 野上部長、神田、諏訪、中田、水谷諸先生、柴見氏、畑中助手、學生十名。

大谷學會公開講演會要旨

本會春季公開講演會は、六月十六日(土)午後一時より開催。

先づ野上學務部長の挨拶あり、次で野澤、大山兩氏の講演があつて、四時散會した。講演要旨を次に掲げる。

清辨の大乗佛說論

本學講師 野澤 靜 證

清辨の大乗佛說論は中觀心論第四章に於て論ぜられてゐる。さうしてその大乗佛說論は要約すれば、(A)歴史的な面と、(B)教相に關する面と、から論成されてゐる。

(A)、聲聞側の主張。根本結集に於て結集された三藏中に大乘の三藏は攝せられてゐないこと、教團分裂後の諸結集に於ても大乘の三藏は結集されざりし故に十八部派に屬せざること、この二の理由で大乘非佛說を唱へる。

清辨の論成。根本結集には佛所說の法門がすべて收録されたと考へられない。また根本結集時に結集された三藏は既に散逸してしまつて、現存するものは各部派で各別に結集されたものである。結集者が異なるから排列順序も異つてゐて聲聞乘一

般に通じて權證となる三藏は認められないのが現状である。既に聲聞乘一般に通じて權證となる三藏が認められないにもかかはらず十八部派は、各自所依の三藏に攝せらるゝとなし、以て佛說だとしてゐる。この點、大乘の三藏も亦利他に關して聲聞乘と異つてゐても自己の所依の三藏に攝せらるゝから、同じく佛說である。若し結集者が異なる點で非佛說を主張すれば、大乘のみならず聲聞乘すべての部派は非佛說である、といふのである。

以上が歴史的な面からせる大乗佛說論の概要であるが、この方面からは何れも佛說か非佛說かであつて、一が佛說で他が非佛說であると論證することは不可能であると考へられる。大乗佛說論が眞に論證されてゐるのは次の教相の問題に於てである。謂はば、教相判釋に於て大乘は佛說であると論成されてゐると見られる。

(B)、聲聞側の主張。八聖道こそ無上菩提を證得する唯一の因である。因は同一であるけれども果に於て三菩提の差別の生ずるのは根の利鈍に由來する。聲聞乘中にも十六阿羅漢の差別があり、獨覺にも五類の差別がある如くである。大師たる釋迦牟尼は利根なる故に聲聞乘所說の八聖道によりながらも成佛した。だから、成佛といふ點で大乘と名けるならば、聲聞乘が即ち利根なるものにとつては大乘である。現在流行の大乘は八聖道より別な修道を説くから佛の所說にあらず。

清辨の論成。大乘に於ても無上菩提を證得する道は八聖道であると説くから、「別な道を説くから佛の所說にあらず、」とい

ふのは當らない。尤もその教相が異なる點で別な道だとすれば、それは許されるにしても、唯それだけで直ちに佛説にあらざとすることは出来ない。教相の異なる場合には、偏頗なき覺慧に依り正理を以て隨量し、果して何れが眞に聖教量であるかを確定すべきである。何となれば、諸佛世尊の二諦に依る說法は印定を具し (saṅketa-vat) 密意を具せる教説であるから。即ち、勝義としての說法は、言亡慮絶なる眞如（これが彼にあつては眞の意味に於ける勝義諦）が佛の慈悲を動力因とし言葉を質料因として吾等のために世俗諦として自己顯現せるものである。この世俗諦は、復た實世俗となつて世俗としての說法を邪世俗として對治し已れば言亡慮絶なる眞如としての勝義諦に還歸する、といふ深密意趣を具するからである。

乃ち、聲聞乘の阿含を見るに、そこには四諦十六行相・三轉十二行相の觀法を説き、これによつて解脱すと説くけれども、この阿含は正理に相應せるものではない。何となれば、「これは實に苦の聖諦なり、生も苦、老も苦」云々と説かれてゐるのは世俗としての說法にすぎないからである。即ち唯名無實で苦聖諦ではないからである。従つて唯名無實なる苦を境として「これは苦の聖諦なり」と苦等を觀するを正見となすが、實には苦をありのままに見るのではない。即ち、如實知見ではない。苦の行相を了得するからである。かくて言葉通りに有執する聲聞の正見等の八聖道は勝義としては虚誑であつて道諦たり得ない。即ち、佛の深密意趣にかなわない點で非佛説である。

然るに、大乘に於ては苦等を觀ぜざるを以て正見とする。觀

ずることなき姿にて觀ずる故に、苦の自性を増益し了得することがない。従つて苦等は空・無の姿にて一切時にそのまゝ安住する。即ち、大乘の正見等の八聖道は苦等の實相に契合せる (tattva-prayukta) 故に眞實智見であり、正理に相應せる聖教であつて、これこそ佛説であるといふのである。

リルケについて

京大教授 大山 定一

「運命を持たないことが僕の運命です。」詩人はできるだけ體驗から身を引かねばならない。よく引用されるリルケのこの言葉は一般に文學が志同するものと逆なことを示す。偉大な運命、偉大な體驗を持つことが文學にとつては大切なことである。しかるにリルケはこれを否定する。ここにリルケの文學の新しさがある。リルケの文學を評してホイムラーは物理學上の ϕ から出發してあると言つてゐる。「大膽にどの鳥よりも強く翼を擴げて、高く高く飛翔」する小鳥は最後に「落ちねばならぬ」偉大な運命、偉大な體驗を求めて高く飛翔しても人間は最後に、運命を持たない、自己の中心に落下して、實存の ϕ に歸らねばならぬ。リルケの詩は繊細、清純、優美であるといふだけではあたらぬ。それはリルケの實存の ϕ から生れたことを知らねばならない。

しかしリルケは「運命を持たず、體驗から身を引く」と云つても、周圍、社會から全く絶縁した孤獨をうたつてゐるのではない。「オルフォイスに寄すソネット」の中に、詩人をアンテ